

日本語・日本文化学類

学生の確保 (人)	年次	定員	志願者	受験者	合格者	入学者
	1年次	40 ※－ (40)	251 ※1 (241)	251 ※1 (241)	52 ※－ (50)	45 ※－ (46)
編入学・再入学	－ ※－ (－)	－ ※－ (－)	－ ※－ (－)	－ ※－ (－)	－ ※－ (－)	

学生の進路 (人)	卒業者	就職者	就職者の内訳			研修医	進学者	その他
			企業	教員	公務員			
42 ※－ (65)	30 ※－ (39)	19 ※－ (26)	7 ※－ (5)	4 ※－ (8)	－ ※－ (－)	4 ※－ (9)	8 ※－ (17)	

・ () は前年度の数値を、※は外国人留学生を内数で示す。

1 日本語・日本文化学類の活動

[教育]

- 本学類は、日本語教育及び日本文化発信の視点から日本語と日本文化を客体的にとらえ、それを諸外国の人々に伝達するための専門的知識と能力とを身につけ、文化の創造者たりうる人物の養成を課題としている。
- この目標を達成すべく、カリキュラムを日本語・日本語教育を中心とした日本語分野と、日本文化、異文化理解を柱とした文化分野の2分野に分けて構成し、それぞれについて精選した授業科目を開設した。
- それぞれの開設科目については、1科目1ページを用いたシラバスを作成し本学類のホームページでも読めるようにし、学生の履修の助けとした。またカリキュラム委員会が中心となって、各学年について4月当初に履修のガイダンスを行い、学生の質問に答えつつ履修の指導を行った。
- 教育方法については、講義、演習及びその集大成としての卒業論文に加えて実験実習を重視し、その結果を「日本語・日本文化実習報告14」として刊行して、大方の批判を仰いだ。
- 文部省の招聘した日本語・日本文化研修留学生(日研究生)をのべ22名受け入れ、独自のカリキュラムを組み教育にあたった。その一環として、日研究生それぞれに研究テーマを設定させ、院生のチューターの協力も得て修了レポートを作成させた。そして、その成果を「異文化との出会い」と題する報告書にまとめ関係各方面に配布した。このプログラムは短期留学生受け入れ構想のはしりともいえるものであり、留学生受け入れに関するさまざまなノウハウの蓄積におおいに役立っている。
- 短期留学生を22名受け入れ、(5)と同様のプログラムを組み日本語・日本文化学類全体で教育に当たった。
- 本学類では、スロヴェニア共和国リュブリャナ大学文学部と大学間交流協定を結んでおり、その一環として昨年7月に3名、本年3月に3名、本学類生がリュブリャナ大学で日本語教育体験実習を行った。トルコ共和国ボアジチ大学文学部とも交流協定を結び、同じく本年3月に4名がボアジチ大学で実習を行った。これらは本学学生にとっても実習先の学生にとっても貴重な経験となった。さらに昨年度からフランス共和国のリヨン第三大学とも交流を始め、本年3月には2名の本学類生が日本語教育実習を行なった。
- 教育効果をあげるために、3年前から学期集中制を取り入れている。このことは授業を集中的に行える等その効果があがりつつある。また同目的で授業の講義録・テキスト、さらには外国の大学との交流の記録を新書判の「日・日双書」として出版し、本年度は6冊となった。

[学生生活]

- 学生生活の指導は、クラス担任が中心となり学生担当の教員等と連携を取りつつ行った。3,4年生については、卒業論文の指導教員もこれに加わり個々の学生の指導に当たった。
- 就職指導については、就職委員会を中心にして講演会を催したり、個々の学生の求めに応じて相談に当たったり、また助言を与えたりした。昨今の厳しい就職情勢からみてもまずまずの成果をあげていると考えている。

2 教員の教育業績評価の状況

授業等に対する学生からの評価については、学生がアンケートをとり、それについて学生のクラス代表との会合、ランチミーティング等で教員側に伝えられ、よりよい授業を作るように工夫している。またそれぞれの教員の創意工夫も行っている。昨年の課題を受けて前進しつつある。

3 自己評価と課題

- 本学類は教員数が非常に少ないが、そのことが幸いしてか、教員間の意志の疎通が比較的円滑で、カリキュラムを中心とした教育体制や個々の学生の把握・指導等隅々において目の行き届いた対応ができておりと自己評価したい。半年、1年の物差しでなく長期的展望のもとで学類教育を考え、常に生身の人間を預かっているという自覚と責任をもって日々の教育活動に当たっていききたいと考えており、またそれを実践して来た。
- 本学類は学生定員40名で、留学生を毎年30数名受け入れている。教員の数はこれに比して20名余と少なく、教育・研究両面に少なからず影響を与えていることは否めない。教員の増員が目下の最大課題である。
- 本学類には日本語教師養成という社会的な要請が寄せられているが、日本語教師の職業としての安定性に結びついていない。学類としてどのように対処すべきかが進路上の大きな課題となっている。
- 学期集中制の評価を十分に行い、さらにより充実したカリキュラムを組むべく努力していく必要がある。